

特集●就業力



大学正門付近の桜並木



今年度の新入生集合写真



いわて復興フェアの様子



大船渡市・復興計画のためのワークショップ



大船渡市・復興計画のためのワークショップ



県大モールの初夏



オープンキャンパス



01 体育祭



緑のカーテン 設置直後(2011.7.7)



緑のカーテン 2カ月後(2011.8.29)

CONTENTS

特集●就業力 おじゃまします

Tee KianHeng ゼミ / 栗田但馬ゼミ

New Intelligence

辻盛生 講師 / 鈴木正貴 助教

研究最前線

倉原宗孝

学部ニュース

オープンキャンパス

キャンパス・アテンダント

体育祭の開催

学部における震災対応研究や活動

被災学生救済基金のお礼

風のMont達

情報数理と政策③

「無味乾燥の中に意味を見出す訓練」

この夏の節電

岩手の地形③

「山と平野の境界」

特集 ● 就業力

就業力って？

就業力は一般に「学生が自分に合った仕事を見つける能力」(文部科学省)とされています。本学部では、これを「様々な場面で、多様な人々と協働して成果を出していくために必要な力」と再定義しています。就職活動の間際だけでなく、在学中から意識してほしいものです。

総合政策学部は、様々な分野の人と協力して社会問題の解決に当たることを学部の理念としています。したがって、就業力を高めることは、本学部の教育目標の実現に直結することです。

本学部が考える就業力は、三つの能力から成り立っています。「人間基礎力」、「人間応用力」、「地域貢献力」の三つの能力です。

「人間基礎力」は「現実社会に目を向けるための前提」として備えるべき能力です。自身の内面に向かってくる事象を適切に捉え、処理・対応するために必要と考えられます。「人間応用力」は「他の様々な分野の人々と積極的にコミュニケーションを取り、成果を出すための前提」として備えるべき能力です。「人間基礎力」に加えることで、自身と周囲との協働による相乗効果を生み出すために必要と考えられます。

「地域貢献力」は「狭い枠にとらわれず、新たな現実を作り出す前提」として備えるべき能力です。「人間基礎力」と「人間応用力」に加えるこ

とで、自らが革新的な政策推進の中心となっていくために必要と考えられます。

就業力を育成するために、本学では昨年より様々な対策を進めています。これに呼応して本学部では就業力育成委員会を設置し、①E-マップの測定と活用(後述)、②E-マッププロジェクトへの協力、③キャリア教育の体系化(キャリア科目「産業事情」について後述)などを進めています。

就業力に関わる授業

本学部では現在、キャリア教育の体系化作業が進行中です。現時点では、専門基礎科目として「地場産業・企業研究」(二年前期)と「産業事情」(三年前期)が用意されていますが、将来的にはさらに拡充される予定です。

「地場産業・企業研究」は岩手大学との共同授業です。今年度は両大学習合せて約40名の受講生を集め、二カ月間にわたって、岩手大学上田キャンパスにおいて実施されました。岩手県庁、盛岡市役所、岩手ホテルアンドリゾート、盛岡セICO工業、盛岡信用金庫、ジョイイス、テレビ岩手、ベアレン醸造所より、人事採用担当者をお招きして、地元企業で働くことの魅力、採用や人材育成に関する基本方針などを説明していただきました。また、希望する職場を訪問して詳しく説明を受けてさらに理解を深めるとともに、OB・

「就業力」とは、あまり聞き慣れない言葉ですが、就職活動に限らず、様々な場面で必要になってくるものです。今回の特集では「就業力」の意味や、それに関わる本学部の取り組みについて紹介します。

OGの先輩から就職活動や職場での体験についてアドバイスをいただきました。

「産業事情」は平成一七年度に設置された科目ですが、本年度からは内容を全面的にリニューアルし、E-マップの活用を前面に押し出しています。一五回の講義全部で、相手の発言を注意深く聞く「傾聴力」から、「創造力」の源泉の考察まで、一二の能力要素すべてを高める演習を実施したのです。



就業力に関わる授業：「地場産業・企業研究」の一コマ

E-プロジェクト

E-プロジェクト(以下、Eプロ)は、E-マップと並んで本学において就業力育成の柱となっています。就業力に限らず、何事も、自分の力を使ってやっていかなければ身

につきません。講義を聴講することは、あくまでもヒントに過ぎないのです。Eプロは自分の力と世の中の動きを、どのようにすり合わせていくべきかの訓練場なのです。本学部としても、積極的に学生を誘ってこの取り組みに関わっています。

Eプロはチーム活動です。四月と九月に新規プロジェクトの募集があります。最低限四人のメンバーを集め、教員に顧問をお願いする必要があります。大学から活動経費の支援がありますが、それに見合うだけの計画を作らなければなりません。つまり、スタート段階から様々な就業力が試されるのです。

本年度Eプロには「復興girls*」やビジネスコンテストへの参加のような取り組みもあります。皆さんも、ぜひ応援してくださいね。



Eプロジェクト：復興girls*の活躍

おこやまごまご Tee KianHeng ゼミン



理系女子を魅了する 経済統計学への入口

ティーキャンヘン准教授は経済統計学やファイナンスの専門家。ゼミンもその硬派であるうと訪ねたが、テーブルを囲むのは四年生の千葉伊織さんに、三年生の安在祥子さん、小笠原知美さん、千葉麻友美さん、三上晴夏さんと女性だけである。うちの女性は元気なんです」と、ティー准教授はあくまでも穏やかだ。

とはいえゼミンは皆、統計学の授業や天候デリバティブの演習で「数字を扱うのが面白いと実感した」という理系女子。四年生の千葉さんのテーマは、岩手県民の消費構造の実証分析。ティー准教授にとっても未調査分野だが「おもしろいのでやってみよう」と、過程そのものを楽しんでる。一方の三年生は、難解な専門書『現代経済入門』を論議中。経済の全体を把握したのち興味分野を絞るのが定例であり「うちの学生なら、このくらい理解できな」と、ティー准教授はさっしりと語る。

しかしこのゼミン、しんと静まり返っていることはいくぶん分らないことは「おこやまごまご」という先生の穏やかな問いかけに、経済学者ミルトン・フリードマンからいつしか哺乳瓶のCMへ会話が果てしなく拡大していく。先生には本当に何でも話せる」と千葉さんは言い、この問口の広さが統計学への興味も広げているようだ。

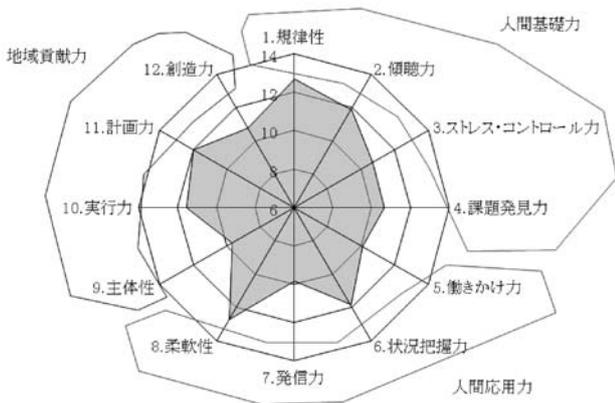
E-マップ

E-マップは、本学部の考える（就業力の自己診断尺度）です。EはEmployability（就業力）の頭文字で、就業力については、前ページ冒頭に記しました。マップは「地図、尺度」です。つまり、人生を航海するための海図です。

使い方は以下のとおりです。まず、「E-マップ質問シート」に記載されている様々な質問（経済産業省の提唱する社会人基礎力の一二能力要素に対応）に自分で答えを記入します。就業力の各能力要素が数字で示されます。これを「E-マップ結果シート」に転記して、グラフを作ります（So）。出来上がったグラフは右図のようになります。図を見ると、自分自身の強みと弱みに分かりますので、どの部分を伸ばそうか、どの弱点を克服しようか、という計画を考えるきっかけになります（Plan）。

そして、自分で考えた計画に従ってキャンパスライフを送っていきます（Do）。この中にはE-プロジェクト（前述）も含まれます。

このようにSee→Plan→Doを繰り返すことで、就業力が次第に伸びていくことが意図されています。



E-マップは成績評価（他人と比較するためのもの）ではなくて、自分自身の強みや弱みを把握したり、変化に気づくためのものです。その意味で、これまでの学力のみを重視する大学の姿勢を転換するものです。

右図は本年度三年生のE-マップ平均を明示したものです。これを見ると、学部生全体としての強み（柔軟性・規律性など）と弱み（働きかけ力・主体性・発信力など）が読み取れます。どのように強みを伸ばし、弱みを克服していくかを考えていく必要があります。

（就業力育成委員会）

地域公共人材研究センター

地域公共人材研究センター（公研センター）は、学部学生の公務員採用試験対策のサポートを主目的に活動しています。われわれのスタンスは、「学生は公務員試験を直視し、できるだけ早く準備を始めよ」です。何よりも学生の意識改革が必要です。公務員試験の問題は難しくはありませんが、公務員人気により高水準の争いになっていきます。そこで高得点を収めるには、あらかじめ十分な対策が必要です。過去問から出題傾向をつかみ、短時間で答えを導くという地道なトレーニングが不可欠です。目標を決め、時間をかけてそれをやり抜く決意が必要です。

例えば、公務員試験の一次試験では、二時間で四〇問という大量の問題が出ます。中でも数的推理や判断推理と呼ばれる分野があり、これを効率良く解くのがポイントです。志願者はこれらの解法を一通り身につけて、問題を見た瞬間に適切な解法を覚えてはめ、計算していくという訓練が必要で、これは勉強というより、むしろ「トレーニング」という言葉がぴったりです。反復練習が肝要で、これだけでも時間がだいぶかかります。公務員試験は四年生の夏に受験しますが、二年前の二年生の夏くらいからは本格的に準備してほしい。もっと言うなら、一年生で大学受験の試験期が残っているうちに、公務員対策を意識してほしい。



公務員模擬テスト会の様子

当センターの具体的な活動としては、センター専用室の開設、問題集・参考書の提供、模擬テスト会などを行っています。

模擬テスト会は、本年五月と七月に実施しました。本番さながらの雰囲気です。本番さながらの雰囲気です。これにより公務員試験のおおよそのイメージが学生に広まりつつあります。すなわち「準備しなければ危うい」と。

また、学生の希望者からセンターに所属する学生（センター員）を決めています。センター員には、公務員試験の勉強会や、先輩の合格体験を聞く会への参加など、いっそう手厚い支援を予定しています。

公務員試験は最終的に合格することが大事です。学生の成績の向上のためには、甘えを許さない硬派でいきたいと考えています。

（地域公共人材研究センター）

おじゃまします 葉田但馬ゼミ



現場で知る地域の問題 笑いそして人情も大事

地方財政学が専門の葉田但馬准教授。地域の活性化は、生活すべてが一体化して発展していかなければならないと、県内の農山漁村へ徹底した現場主義を貫いている。

ゼミでも夏の二泊三日の調査合宿が恒例だが、対象市町村の選択は学生主導。候補地探しから始まって、いざ決定すれば現地調査の下準備。行政関係者から旅館経営者まで、あらゆる職種への聞き取りもすべて学生が担当する。「最初はどのよう質問すればいいのかわからない」というが、その緊張感と現地で見聞した事実こそ、研究に向かう原動力。四年生の氏原史恵さん、柏木健吾さん、錦山智恵子さん、農業空士さん、丸山千尋さん、三浦紗矢香さんの六人は、地域医療や観光等々、それぞれの問題設定がとも明確。三年生の菅野龍さん、熊谷雄貴さん、今愛理香さん、八重樫美咲さんらは合宿に向けた候補地選定の真っ最中である。

このゼミ合宿のもう一つのクラ イマックスが夜。准教授いわく「構想・練習九カ月、発表二時間」という出し物が披露され、この一夜を境に葉田ゼミの団結力は一気に高まるのだ。先生は、どんなことにも熱い思いを抱いている。七、四年生、関西仕込みの話術で笑わせながらも、研究に学生に真っ正面から向き合っている。

「楽しむ」姿勢で重ねたステップが 水辺緑化の専門家の道を拓いた

辻盛生講師



◆プロフィール

埼玉県生まれ。博士(学術)。岩手大学農学部林学科、同大学院農学研究科林学専攻博士前期課程修了後、小岩井農牧株式会社に入社、水辺緑化に取り組む。平成15年岩手県立大学大学院総合政策研究科博士後期課程に入学、18年修了。NPO「もりおか中津川の会」設立をはじめ、多様な市民団体のアドバイザー等でも活動している。

川や湖などの水辺で元気に遊ぶ子どもたち。そんな子どもを、親しみを込めて「水ガキ」と呼ぶことがある。「私自身「水ガキ」で、昭和五〇年代の埼玉は最悪の水環境だったにもかかわらず、水辺に生物を探していた。水辺緑化に進んだのも自然の流れだったと思います。」

そう話す辻盛生講師は、小岩井農牧株式会社社員として水辺の緑化事業に携わりながら、八年前には本学大学院総合政策研究科に入学、第一号の博士号取得を果たした。そして今年四月、母校の教員として本格的な研究者生活を送ることにした。授業では水圏環境システム論、生活環境化学論を担当する。

埼玉県出身の辻講師が岩手県で研究者生活を送ることになったのは、いくつものタイミン

中津川の豊かな自然環境に衝撃を受けました。こんな環境のある場所に住みつくには?と考えると、小岩井農牧を就職先に選んだんです。ちょうどその年、同社山林緑化部(現環境緑化部)内に水辺の緑化部門が設立されて、辻講師はそこに配属された。それは、国交省による河川政策「多自然型川づくり」が大きな政策転換を迎えていた頃でもある。

「実際、川の緑化は難しい。その場の植生や条件を見て、植物種や工法を決めるといった技術面はある程度確立されても、多様性で考えていけば、遺伝子レベルの多様性も必要になる。しかし、その場にある植物を増やすには相応のコストと時間がかかります。」

同じヨシでも、東北と関東のものは遺伝的には違いがある。単年度で成果を求められる公共事業でこれを説明し、企業として事業ベースに乗せるのは難しかった。一方、植栽環境の検討により草丈の低いスゲ属植物が選ばれたが、その水質浄化力の根拠を示す文献はなかった。そんな時に本学の平塚明教授と出会い、大学院生として共同で植栽水路の水質浄化特性という基礎的研究をすることになる。博士号も取得し、小岩井農場の中に水質浄化人工湿地も造って水質による面積算出ができるデータを得ることに成功したのである。

それから五年、辻講師は本学の教員となった。小岩井農牧で主任研究員として実績を積みながら、NPOの設立をはじめ様々な活動にも関わり、国内の研究者とも交流する中で「可能性に対して挑戦してみたくなった」という。現在は、水辺植物の持つ微気象の緩和機能に応用した「屋上湿生花園」について、埼玉県川越市にある東洋大学キャンパスにおいて共同研究中。今や、水辺緑化の研究は都市問題にも広がりがつつあるのだ。

民間企業から大学へ。自身の歩みは「新しい環境に面白さを見い出せたから」と、辻講師は振り返る。それはこれから就職する学生にとつて、一つの可能性になるかもしれない。

「社会に出ると、何をやらせられるのか分からない。その中で工夫し、自分なりの仕事の楽しさを見い出していくことが必要です。その次に自分のオリジナリティを出し、新しい仕事を創造していくステップを作っていくんです。企業も、そういう提案型の人材を望むのですから。」

楽しむ姿勢が次のステップに繋がる。それは学業も同じと、辻講師は身をもって教えてくれる。

NEW Intelligence

農村環境は社会全体で守るべき。 現場を訪ね、研究のヒントを探す

鈴木正貴助教



◆プロフィール

栃木県生まれ。博士(農学)、技術士(農業部門:農村環境)。宇都宮大学大学院農学研究科、東京農工大学大学院連合農学研究科修了。小規模(水田)魚道を開発し、栃木県西鬼怒川地区でその効果を実証。学位取得後、福井県土地改良事業団体連合会に入会し、農村生態系の保全技術の普及に尽力。

岩手のあちこちで見かける農村も、今や単なる食料生産の場から環境保全など多面的な役割を担うようになってきている。この「農村」を研究対象とするのが、今春、福井県から本学へ赴任した鈴木正貴助教。専門の農業農村工学は、以前は農業土木と言われていたものである。

さてこの農業農村工学、一般的な土木とは大きく違う。それは「農村」に特化している点で、道路一本通すにも田んぼの区割りを意識しながら造るなど、地域の事情や文化へ配慮する。それが「風土に根ざした土木」と言われるゆえんです」と鈴木助教。水はけの悪い田の排水計画、構造力学や土壌物理、水理学、農業機械を含む機械工学が加わることも、非常に多面的な視野が求められるのも、農業農村工学の特徴という。

原体験は幼少時代。遊び場の農業水路には魚がたくさん棲んでいた。だが日本の水田では、ほ場整備がどんどん進められ、「お気に入りの水路」もコンクリート張りに様変わり。「あのとき味わった悲しい経験が原動力になって、研究に没入した」という。大学で所属したのも、農村生態系の保全と、ほ場整備との両立を目指した手法や工法に取り組む研究室だった。

その研究室で取り組んだのが、小規模(水田)魚道の開発。栃木県西鬼怒川地区をフィールドに、ドジョウやフナ類が水田と水路を行き来できる仕組みを考案、その効果を実証した。

「うちの田んぼでやっていいよ」と農家の方が理解してくれた。四五種類もの漁法を駆使して、大人から子どもまで、みんなで魚を捕まえ、食べていた地区だったのです。地域風土の把握と住民の理解協力という意味でも、西鬼怒川は理想的な成功事例といえる。

この実績をベースに、鈴木助教は福井県土地改良事業団体連合会へ行く。福井県は、ほ場整備率が極めて高く、ドジョウやフナ類などの生息数も極端に少ない一方で、当連合会には農村環境保全の窓口となる環境計画課の設置計画があったからだ。「ここでは土木の技術を学びつつ、生物と人間共存の折衷案を見い出すことが役割だった」と鈴木助教は振り返る。

そして次なる新天地・岩手県でのスタートの春、東日本大震災は発生した。

だが鈴木助教は「現場にしかテーマは転がっていない」と被災地へ向向き、ボランティア活動に取り組んだ。そこで目の当たりにした現地状況、ことに専門の水田の壊滅的被害には言葉が失ったが、「もう一度田んぼを作り直せるという、これも一つのチャンスと考えたい」と、気落ちした様子は一切ない。

「農村環境は、もう農家だけでは守れない。非農家が参加する新たな維持管理体制の構築が必要だ」。これまで培ってきた知見と行動力で、鈴木助教は岩手の復興も見据える。

そんな鈴木助教の、県立大生への期待は高い。「地元を愛し、何かしたいという気持ちがある。何より、まだ農村で遊んだ記憶を持つ学生がいるのがいい。これは研究を進めていく上での原動力になります」。幼い頃の遊び場が進むべき道を示したからこそ、体験を大切にしたいのが鈴木助教。「学生と一緒に考えてみたい」と、新たなフィールドワークも始めている。

研究最前線

人と地域が輝く
まちづくりへ

倉原宗孝



「まちづくり」という言葉はよく聞くとお思います。では、この「まちづくり」という言葉が最初に使われ始めたのはいつ頃からか、皆さん、知っていますか？ 講演会などで時々、市民の皆さんはじめ行政職員の方々へも質問するのですが、案外、間違っている人が多いですね。…80年代？ 90年代？

答えは1963年頃で、全国的に都市再開発が盛んだった時代です。正確には幾つかの説があるようですが、名古屋市での出来事がよく言われます。都市開発に伴ってお店を道路から後退するように告げられた商店主が、仲間とともに海外の事例も学びながら自分たちで町の整備構想を作りました。その過程で生まれたのが「まちづくり」という言葉です。より正確に言えば、当時は「町(街)づくり」と記されていました。

ここで重要なのは住民・生活者が「町を作る」(=都市を計画する) ことに関わっていく道が開かれたことです。それまでは町を作るのは行政や専門家だけの仕事で、住民・生活者は彼らが作った町に住む、あくまで<受け手>としての存在でした。こうした住民・生活者が町の<作り手>として登場したのです。今日では「参加」や「協働」といった言葉も使われ一般的になっていますが、その先駆けといえるでしょう。

ところで、わが岩手県において、東洋一の硫黄鉱山として栄えた松尾鉱山を知る人もいます。そこは「雲上の楽園」とも呼ばれ、近代的な集合住宅、学校、映画館、etcと、当時最先端の都市機能が集積した町でした。その松尾の広報誌を見ると、少なくとも1964年(昭和39年)には「街づくり」の標記と、それに向けた意図が見られます。

こうしたまちづくりですが、80年代になると地域の「個性」が重視され始めます。それぞれの地域の状況を知り、そこにふさわしい取り組みを進めていくことが認識されます。同時に、ここでは地域の個性としての「宝物」に着目がされます。どのような地域でも潜在・顕在する優れた資源としての宝物があります。それをいかに活かしていくかが重要です。こう

した地域の宝物を最もよく知るのは、地域に暮らす人々自身です。その上でも、そこに暮らす人々(住民)のわが町に対する認識、意識づくりが重要といえるでしょう。

さて、私はこうした「まちづくり」の研究をしていますが、対象とするテーマは極めて多様です。地域や人々の暮らしは、人工・自然、ハード・ソフト、教育・福祉・文化・コミュニティなど様々な要素が総体的に織りなされるものだからです。近代社会では専門性を重視した分野ごとの取り扱われ方がされがちですが、様々な分野を横断的に結びながら総合的な暮らし・まちづくりを考えています。対象地も様々です。都市部であれ農山漁村であれ、子どもからお年寄りまで、そこに暮らし関わる人々が豊かになるまちづくりを思考しています。

研究方法として、各地域の具体的な活動に関わっていくことに特徴があります。勿論、様々な資料・データを調べたり、先進的な事例調査などもしますが、同時に私自身で各地のまちづくりを仕掛けたり、あるいは面白い活動に参加・参画していく中で成果を積み上げながら、その過程にみる効果・課題・可能性などを分析していきます。その中では、ハード・ソフトの成果もですが、同時にそこに関わる人たち自身が生き生きとしてくるまちづくりを目指しています。

先ほど触れたように、地域や暮らしを総体として取り扱う実践的な研究ですから、テーマも多様です。これまで私自身が行ってきた活動の幾つかを記すと、子どもの目線から見たまちづくり、屋台による中心市街地活性化、高齢者の価値を活かしたコミュニティ形成、歴史的建造物の保全と景観形成、農村の各種資源を活かした地域開発、市民・行政・企業の協働する産業・雇用促進、…etc。

まちづくりは、関わる人たち自身が、苦労とともに楽しさや豊かさを享受するものです。これからも時代と地域の状況を見つめながら、新しい地域社会を拓くまちづくりに赴きたいと思います。
(本学部教授・都市計画学)



オープンキャンパス



学生によるよろず相談

七月三日にオープンキャンパスが開催されました。いつものように総合政策学部学生会の協力によって前日から装飾などの準備をしました。

当日の学部説明会では高校生に教員や先輩を知ってもらうと、今年は学部長、学部長以外にも授業と就職の内容を紹介する教員、勉学と課外活動を紹介する学生に登場してもらいました。模擬講義では「地図と空中写真で見える自然と歴史」と「経済学から見た「選ぶ」こと」の両講義にたくさん的高校生が参加しました。

学部棟のイベントでは入試相談、実験室開放、研究室ツアー、在学生によるよろず相談などの企画で賑わっていました。特に今年度は新たにサイエンスカフェという企画で実験や工作を行い、多くの高校生に集まってもらいました。液体状のチョコレートを利用した災害発生メカニズムの実演や、リスがオニグルミを食べた跡を使った工作を楽しんでもらいました。

暑いなか参加してくださった高校生の皆さん、機会があったら、また大学においでください。

(高大連携委員会)

キャンパス・アテンダント

今年度から新たな取り組みとして始まった「キャンパス・アテンダント(以下CAと略)」。これは、本学の在学生がオープンキャンパスや大学見学会などのイベント時に来学者を案内したり、高校訪問の際に大学の説明を行うという活動です。

募集人数三〇名に対して計三六名の応募があり、書類選考を経て全員が合格となりました。五月末には事前研修が行われ、大学に関する基礎知識や接遇マナーなどを学び、六月以降の活動に備えました。

これまで既に、来学された小中高校の皆さんの大学案内(キャンパス・ガイド)やイベント時のキャンパス・ツアーおよび体験談発表など、様々な場面で本学のCAが活躍しています。来場者アンケートでもCAの活動は大いに好評を博しました。

在学生によるこうした大学PRは、本学を訪れる方にとっては新鮮な風となり、また学生自身には自分の大学を新たな視線で捉え直す機会になっているようです。今後予定されている研修会や勉強会でいっそう力を蓄え、これからも生き生きとした活動を展開してくれることでしょう。



高校生を案内するCA

体育祭の開催



リレーで疾走する学部教員

七月九日に陸上トラックで第三回の岩手県立大学体育祭が開かれました。体育祭は有志の学生が運営し、昨年からは宮古キャンパスも合同で開催されています。教職員を含め、百数十人が参加しました。好天のもと、玉入れや障害物競走、綱引き、長縄跳び、リレーなどの競技が、各学部および教職員チームの対抗で行われました。

途中、近所の川前保育園の園児によるかわいらしい和太鼓の演奏もありました。残念ながら総合政策学部からの参加者は比較的小なく、ソフトウェア情報学部との合同チームでした。抜群のチームワークを見せたのが宮古短大。バスで二時間かけてやって来ただけに、気合いが入っており、長縄跳びは断トツの優勝でした。教職員チームは「大人げない」との罵声(？)を浴びながらも、綱引きで優勝しました。

競技の後は食堂で懇親会が開かれ、学部を超えて親睦を深めました。総合政策学部から参加した教員たちが翌日筋肉痛に苦しんだことは、ここだけの秘密です。(見市建/本学部准教授・国際関係論)

学部における震災対応研究や活動



ワークショップの様子

三月一日の東日本大震災の後、当学部の教員・学生も様々な形で、微力ながら復興へのお手伝いをしていました。

震災復興支援のための学部としての取り組みは、多岐にわたります。

多くの教員・学生が携わったものとしては、大船渡市の災害復興計画策定のためのワークショップの進行役があります。五回のワークショップで延べ四三名の教員が関わりました。

また、社会調査を通して街の復興の在り方を考えていくグループや、震災時の地域住民の対応をヒアリングして記録している教員もいます。技術的な支援としては、仮設住宅にアサガオを利用した温度上昇抑制を目指した緑のカーテンの設置や、被災地においてインターネットの環境構築を行った教員もいます。

学生の取り組みとしては被災地にある企業の商品を東京銀座のいわて銀河プラザで販売するイベント「いわて復興フェア」を行ったグループもあります。

他にも多くの活動があります。次号では、これらの詳しい活動内容の紹介をしたいと思います。

被災学生救済基金へのご協力に感謝します

三月一日の東日本大震災で被災された皆さまには改めてお見舞い申し上げます。

この大震災により当学部でも実家を流されるなど、三〇人を超える学生が甚大な被害を受けました。ご家族が受けた経済的損失や学生の精神的痛手は計り知れません。震災直後、私たちが教員が思ったことは、経済的な理由から大学を辞めてしまう学生を一人でも出してはならない、そのために何ができるだろうか、ということでした。

大学としても、授業料や入学金の減免措置などを講じました。一方、総合政策学部では教員有志が中心となり、被災学生救済基金を立ち上げ、被災学生の支援にいち早く乗り出しました。

七月末までの時限的な基金でしたが、集まった金額は四五万三〇〇〇円に上りました。支給対象者は二十八人、このうち他の奨学金の支給を受けることになった六人には七月以降の支給を辞退してもらい、その結果、二二人に四月から約半年間、毎月三万円を支給することになりました。被災地への義援金の運配が報じられているなか、不十分ではありますが、所期の目的は達成されたと思っております。

多くの方々からこの基金に賛同していただきました。学部教員はもちろんのこと、教員の友人・知人・親族の方からもご厚志を頂戴しました。卒業生からも支援していただきました。海外からの募金もありました。心より御礼申し上げます。

風のモンターダ

教師時代に取り組んだ地域学習。 大学院での学びの先に次の夢がある

博士前期課程1年 石井 修直さん

大学時代に頼まれてやった私塾講師で、子どもたちと付き合うことの面白さを知った石井修直さん。卒業後は理科教師として岩手県に赴任した。

「その頃は、ちょうど学校が非行問題で荒れていた時代。授業や教材うんぬん以前の校内で、『面白い』『分かった』と言わせることでしか、子どもたちと向き合っていけなかった」と、当時を思い出す。教育技術より、まずは子どもたちの実態をとらえたいと教員生活を送る中、気づいたのが子どもたちと地域社会との関わり方の変化だった。

「岩手県にとっての第一次産業は地域産業の柱でありながら、もはや子どもたちに手を出せるような仕事はない。だったら、小・中学校でやっている授業を組み立て直して、『地域学習』という場として作り上げられないかと思ったんです」。



八幡平市の松尾中学校での校長時代、総合学習の時間に行ったのは、地域の大人たちにチューターになってもらった授業。学校に招いたり、生徒たちとその場に出かけたりもした。農業、商工業、

観光そして歴史。福祉や男女共同参画に関わるものも加え、さらに都市計画もある「学習の場」作りに取り組んだ2年間。「地域の現状と、携わっている人たちの魂を伝えたかった。地域に残った人にはもっと誇りを持ってもらえ、離れた人にも誇りを持って故郷を語れるような教育をしたかったんです」。

定年退職後の4月、すぐに県立大大学院にきた。地域との関わりをさらに進め、子どもたちにグローバルな生き方を提案できる知識や発想を得たいと考えたからだ。今は毎日学校に来て、学部の週5回の自由聴講にはほとんど出席。ゼミの飲み会にだって参加する。「みんな年齢以上に大人だし、面白い発想も教えてもらえる。教えられ、学ばせてもらうことに非常に感謝しながら頑張ってますよ(笑)」。退職後の突然の“大学院生宣言”に驚いた家族も、今は「いちばんのサポーターです」と、にっこり微笑む。

「大学院は課題意識を持って自分で解決していく場。すごく忙しいけど、自分を見つめ直し、これから何をやっていくか考えられる絶好の機会です」。

子どもたちにグローバルな生き方を伝えられるような提案型のNPOを作るのが、石井さんの夢だ。

一度決めたら思いはブレない。 勉強も活動も、そして将来の夢も。

3年 佐々木 美南子さん

子どもの頃、祖母の家が大雨による河川の氾濫で浸水した。「相談したら役場で、たらい回しにされて…。知識を補って地域に生かしたいと県立大を志望しました」。AO入試には落ちてしまったが「絶対、県立大に入りたかった」と推薦入試に挑戦、見事合格した。「一度決めたら基本的にはブレないから」。おっとり穏やかな物腰ながら、佐々木美南子さんの「芯」の強さは相当だ。

そんな佐々木さんの活動範囲は幅広い。今

年度発足した学生参加による大学広報グループ「キャンパス・アテンダント」に参加。キャンパスガイドやホームページ作成などの業務のうち、体験談発表グループのリーダーを務め、母校で自分の入試体験を高校生に話す。最近は教師や保護者の対応も行っており、仕事は忙しい様子だ。その一方でソフトボールサークルに所属し、空き時間はできるだけ参加するようにしている。



さらに「滝沢にはスーパーが少なく不便だから」と、学内産直を地域の方々や学生と企画して設立し、ツイッターで学生に利用を呼びかける。もともと料理全般が得意で、学校にも弁当を持参し、忙しい時でも祖母から教えられた料理はよく作る。「高校受験で同居していたとき『自分で作れ、自分で考えて足りないものは自分で補え』と祖母に言われたことが私のベース」という。

卒論に選んだのも、もちろん河川の氾濫について。地元の広報誌を40年分調べ、降水量が100ミリを超えるだけ氾濫することを突き止めた。

「自分でも氾濫を意識した時から、つけていた日記が役に立ちました。発生意因にはいろいろな説があるんですけど、所属ゼミの豊島先生は『一つひとついねいに調べましよう』と言ってくださるんです」。

先生と一緒に取り組む卒論に加え、なんと独学で宅建試験に挑戦する。川の氾濫の経緯から家の立地条件に興味をわき、不動産や住宅関係の仕事に進みたいという夢ができたのだ。試験は超難関だが「一つひとつの段階を踏んできたからこそ、見つけれられた夢」と、簡単に諦めることはない。

佐々木さんの将来は、もう約束されているのだ。

情報数理と政策③ 無味乾燥の中に 意味を見出す訓練

堀籠 義裕

読者の皆さんの中には、数理的な手法は正確で厳密な答えを求めるためのものだとお考えの方が多くいらっしゃると思います。しかし、数理的な手法は、必ずしも正確・厳密な数字を求めることが可能なわけではありません。むしろ、意識調査結果などの現実データを扱う手法では、高度なものであるほど正確さや厳密さの部分で何らかの妥協を必要とするものがほとんどです。

本学部では、現実データを扱う手法を学ぶ際、多くの科目では、現実の数字には必ず誤差があることを前提とする手法を学びます。たとえば統計的な手法を扱う科目(統計学、多変量解析など)では、手法を理解する過程において、「何%の確率でどのぐらいの値の範囲に解が存在するか(信頼区間)」を求める内容を学びます。信頼度が100%の解(の値の範囲)を求めようとすると、範囲が「マイナス無限大」から「プラス無限大」になることに触れます。その内容を基礎としてさらに高度な手法を学んでいくのです。「無限大」は、もちろん現実の数字ではありません。

統計的な手法を用いて100%の信頼性のある答えを具体的な数値(の区間)で求めることは不可能ということです。具体的な数字で解(の区間)を求めようとすると、得られる答えの信頼性は100%より小さい値になります。高度な統計的手法を用いて具体的な答えを求めるには、「想定外」を設けなければならないということがあり、現実データを扱う数理的な手法の多くは、得られる答えに関して想定外の状況が発生する「リスク」があることをあらかじめ前提に置くものだ、ということです。

今日、意識調査や経済データの分析をはじめ、工業製品の品質管理あるいは構造物の設計における技術計算など、社会の様々な場面で統計的手法に立脚する技術が用いられています。今日の私たちの生活は、様々なリスクが含まれたモノやサービスの積み重ねの中で成り立っているのです。取って極端な言い方をすれば、私たちがふだん当たり前のよう享受している「便利」「快適」「安全」「安心」な社会は、不完全なものの積み重ねの上に建っているにすぎないのです。

多くの人が「便利」「快適」「安全」「安心」が当たり前のよう感じるのには、モノやサービスの生産などの場面において、故障などの想定外の事態がめったに発生しないように、改善のためのためまめ努力が続けられてきたからにはかたがたありません。その過程で統計的な手法が重要な役割を担ってきたことは、先ほど述べた通りです。

このように今日の高度な社会の土台を踏まえれば、100%の「便利」「快適」「安全」「安心」は有り得ません。当たり前と感ずる状態がいかに築き上げられているのを知ろうともせず100%の「便利」「快適」「安全」「安心」の確保を誰かに求めることが、現実的でも建設的でもないことは、もはや説明を要しないと思います。また、今日の高度な社会の土台について知りながら(または知る能力があるにもかかわらず)同じような要求をする人は、いわば嘘つきであり、無責任で信ずるに値しません。

本学部で現実社会の問題解決のあり方を学ぼうとする人には、現実をきちんと認識し、それを踏まえた上で実現可能な対処法を探求する姿勢を身につけることが求められます。今日の高度な生活の維持のあり方についても同様です。考えるヒントは、得てして思わぬ所に隠れているものです。例えば、一見無味乾燥な統計学の計算からも、その現実社会での使われ方に想像力を働かせることで、「便利」「快適」「安全」「安心」を賢く享受するためには、その背後にあるリスクと上手く付き合わざるを得ないのだとの示唆が見えてきます。数理を学ぶことは、無味乾燥の中に意味を見出す訓練でもあるのです。

(本学部准教授・政策分析論)

この夏の節電

今年の夏は、東日本大震災による発電所の被災に加え、七月下旬の新潟・福島豪雨の影響で多くの水力発電所が被害を受け、電力の需給がきわめて逼迫しました。

総合政策学部ではまたまった電力を必要とする施設が少なく、パソコンの省電力設定や蛍光灯の消灯といった小さな努力の積み重ねで節電を行っています。梅雨明けが早かったにも関わらず、総合政策学部としての七月の消費電力は、前年比約一六%減となりました。

原発の稼働率低下が予想される中、化石燃料消費量の節減、二酸化炭素排出抑制、さらには再生可能エネルギーの動向も視野に、今後も節電意識が必要とされています。

(節電委員会)



緑のカーテンでできたゴーヤ

岩手の地形③

山と平野の境界

吉木 岳哉

盛岡や滝沢から見る風景で、最も特徴的なものは岩手山であろう。東京や仙台から新幹線に戻ってきたとき、岩手山を見て「自分の街に戻ってきた」と感じたことはないだろうか。岩手山を日常的に見てきた人ならば、石川啄木ならずとも、岩手山はふるさとの情景の大きな一部分を占めているはずである。

あなたが盛岡出身ならば、自宅や近所からの見慣れた岩手山の姿を思い浮かべられるだろう。では、岩手山と盛岡との間はどうなっているか、思い出せるだろうか？

盛岡から岩手山を見ると、平野からの高さが200～300m程度の低い山地が、岩手山の台座をなすように連なっている。この山地は、山麓の平野との境界が非常に明瞭である。衛星画像や航空写真で見ると、この明瞭な境界は南へと連続しており、北上盆地と西側の山地との境



Google Earthで見た盛岡市前潟付近からの岩手山(高さを2倍に強調)

界をなしている。この境界線をもたらしただもの、それはこの場所を通る活断層である。

断層とは、そこを境として大地がずれた痕跡であり、断層のなかでも近い過去に活動歴があり、将来的に再び活動する可能性があるものを活断層という。北上盆地の西側の境界をなす活断層は「北上低地西縁断層帯」と呼ばれ、滝沢村を北端として総延長は約60kmに及ぶ。この活断層は、断層の両側が押し合い、片方が他方に対して潜り込むようにしてずれる「逆断層」と呼ばれるタイプであり、相対的に沈み込む断層東側は低地に、相対的に乗り上げる断層西側は山地になっている。

気になるのは、この活断層の危険性である。人口集中地域の活断層に比べると研究は遅れているが、現在までの知見

によると、それほど危険性は高くないようである。花巻市付近での北上山地西縁断層帯の調査結果によると、この活断層は2500～6000年に1回の頻度で活動し、動いた場合の地表のズレの大きさは1～2m



盛岡周辺の北上低地西縁断層帯

程度と考えられている。活断層が最後に動いた時期は2600年前よりも後、おそらくは歴史時代と考えられていることから、私たちが生きている間に活動する可能性は低いとみられている。とは言っても、街のすぐ近くにあることから、万一にも活動した場合には重大な被害が発生することは意識しておくべきであろう。

(本学部准教授・自然地理学)

●ご意見をお待ちしています

MONTOへのご意見・ご感想・ご要望は、氏名、住所、電話番号を明記のうえ「総合政策学部広報・交流委員会」宛に、下記連絡先まで。電子メール送付 (monto_poly@ml.iwate-pu.ac.jp) でも構いません。よろしくお願いいたします。

MONTO

●【MONTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース Iwate Prefectural University
●第26号：2011年(平成23年)10月29日●発行：公立大学法人岩手県立大学総合政策学部
〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字菓子152-52
代表TEL019-694-2000 学部019-694-2700 FAX019-694-2701(学部事務室)
印刷/株式会社社陵印刷 TEL019-641-8000

《MONTO WEB版》URL

http://www.poly.iwate-pu.ac.jp/monto/index_monto.html

*岩手県立大学のホームページ <http://www.iwate-pu.ac.jp/> から総合政策学部をクリックして、次に「学部機関紙MONTO」をクリックしてもアクセスできます。

●編集後記

▼節電でいつも思うのは、構内には広大な敷地がありながら樹木が少ないこと。樹木は気温を下げるだけでなく、リスやキビタキの棲む環境も創出してくれます(余)▼長い夏休みが終わり、キャンパスは学生たちでにぎやか。コース選択、就職活動、卒業研究、それぞれの目標に向かって期待いっぱい、胸いっぱい(笑)▼原稿執筆が遅れてしまいました。書き始めると早いのですが、現実逃避モードに入るのも早いのです。しかし、現実逃避にも無意識の領域で何かの意味はあるかも(丸丸虫)▼あの暑い夏から一転して、吐く息も白い秋(笑)▼となりました。今年は厳しい寒さが続かないことを願いつつ、効率の良い暖の取り方を検討中です(汗)▼何でもいい、大震災復旧・復興に関わって、何かを感じて、考えてほしい。皆が何かしている限り、岩手も東北も元気になる。そして、記憶から遠のくこともない(汗)▼今回の特集では「就業力」という、皆さんにとってはあまり聞き慣れないものを扱いました。就職にあたって様々な取り組みがあるということを知ってもらえれば幸いです(なっ)

●写真協力■鈴木正貴

●編集スタッフ■金子与止男(編集責任者)・山本健・高嶋裕一・山田佳奈・栗田但馬・島田直明